様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年６月４日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2007～2009
課題番号：19320008
研究課題名（和文）日本中世期の経書学に関する基礎的研究
研究課題名（英文）Preliminary research on the Chinese classical study in Japan during the medieval period

研究代表者
水上　雅晴（MIZUKAMI MASAHARU）
琉球大学・教育学部・准教授
研究者番号：60261260

研究成果の概要（和文）：日本中世期における経学、すなわち儒家の経典に対する解釈の状況の把握を目的に据え、明経博士家として中世期の経学の方面で主流たる地位を占めた清原家を主要な対象として、その経学の内実と実態解明を実施した。同時に、中世禅林における易学に対しても講義記録などを手がかりに検討を加え、その解釈の特徴と時代思潮との関わりについて解明した。さらには、年号決定のための評議の場において口誦された年号勘文集成書により、当時の漢籍の訓読やその背景にある漢学のあり方について考察した。

研究成果の概要（英文）：This research project deals with scholarly condition concerning the Chinese classical study in Japan during the medieval period, mainly aiming at giving detailed outline of the study of the Kiyoharas who, generation after generation, continued to maintain the position of professors at national university, therefore regarded as the authority on the Chinese classical study. On the other hand this project deals with the study of the book of changes among Zen Buddhists, clarifying the characteristic of their interpretation and its intercourse with the trend of thought of the day by using the records of lectures. Moreover, the project team investigates the style of kun-doku (reading classical Chinese texts as classical Japanese texts) of the day and the condition of the study, which determines the style of kun-doku by researching the collective records of the council meeting at court on era name.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
２００８年度	2,200,000	660,000	2,860,000
２００９年度	2,100,000	630,000	2,730,000
年度			
年度			
総　計	7,900,000	2,370,000	10,270,000

研究分野：中国哲学
科研費の分科・細目：哲学・中国哲学
キーワード：中世、経学、易学、五経、清原家、元号勘文

１．研究開始当初の背景

(1)中世経学に関する研究動向と問題点

中世経学については、関連資料が比較的多く残っている四書の方面に研究が集中しているが、江戸時代の経学に対する研究状況と比べると、研究の絶対量が少ないと言える。また、残っている資料について言うと、清原家に関わるものが多くを占める。清原家は、明経博士家として朝廷内の教学機関において儒家の経典の講義を担当する教官の地位を世襲していた。そのため、中世の経書解釈に関して主流の地位を占めていた。清原家の経学関係書は、四書に関わるものが多く、そのため、これまでの研究も四書、就中、関連資料が一番多く残っている『論語』を主要な材料として検討を加えたものが多い。清原家が残した資料は、経伝に訓点を附した「点本」と講義の草稿や聞き取り記録である「抄物」の二種類あるが、これまでの研究は点本と抄物のいずれか一方のみを取り上げて論じることが多く、両方の資料を視野に入れた総合的な研究は少ない。

(2)清原家の経学に関する研究動向と問題点

上の(1)で述べたように、清原家の経学に対するこれまでの研究は、四書に関わるものが圧倒的に多い。しかし、清原家が講義を担当した経書は四書だけではなく、また、その経学の営みが四書のみに限定されたものでなかったことは、現存する関連資料から容易に理解される。つまり、五経に対する解釈の状況について不明な部分が多いのが現状である。

以上のことから、中世経学の宗家と言える清原家の経学に関しては、点本と抄物の両方に目配りしつつ五経の解釈状況を考察した研究を進めることが急務だと判断される。また、清原家の経学関係書はその全てが容易に利用し得る状況に無いので、翻刻作業を通して多くの利用に供する作業も行う必要もある。さらに付け加えるならば、中世において儒家の経典を読み・利用したのは、決して清原家だけではなかったから、清原家の外で経学がどのように展開していたかも把握する必要もある。

２．研究の目的

上に説明した通り、日本中世の経学に関しては、解明すべき事柄と実行すべき作業が多く残されているので、本研究では限られた研究期間内で実行可能なものにしぼって研究を進めて行く。

具体的に言うと、日本の中世期の経書学における解釈の諸相、及びその解釈の後代に対する影響等を当時の学術・思想状況の中で総合的に把握すると同時に、中国の学術・思想の周辺国への影響の一様相を解明することを目的とする。加えて、中世期に伝承されていた経学関連の著作から、中国の経書学に対して価値を有する資料を選定・抽出し一般の利用に供することも目的とする。

３．研究の方法

(1)情報の入手と整理

日本の経書学に関わる一次資料は、点本にしろ、抄物にしろ、刊行されていないものが少なくない。その中には、所蔵機関が全冊の画像データをＨＰ上に公開しているものも含まれるが、現在のところ、その種の資料は少数にとどまる。そこで、必要なものに関しては、所蔵機関に依頼して複写を入手し、それができないものについては、所蔵機関に出向いて閲覧する。入手した情報については、必要に応じて電子データを作成する。

(2)宋学流入の影響に対する考察

『論語』の点本と抄物が宋学流入の影響を受けたかに関しては、すでに詳細な研究があり、点本の訓点は宋学系の解釈の影響をほとんど受けていないのに対して、抄物には宋学系の解釈書が多数引用されていることが解明されている。しかし、他の経書の点本と抄物に関しては同様の調査・研究が進められていないので、それを実施する。調査対象を五経も含めた経書全体に拡大することで、清原家の解釈に対する宋学系の解釈の影響が総合的に把握される。

(3)字訓の決定要因に関する考察

点本の字訓の大半は宋学の流入前に確立しているが、それらの字訓がどのように決定されたかについて解明を試みる。『論語』に関しては、その字訓が基本的に古注である皇侃『論語義疏』の訓詁を反映していることが明らかになっているが、全ての経書に関して詳細な訓詁を下している古注が存在するわけではないので、字訓が何によって決定されたかについては、一つの要因だけで説明できないことは自明である。

点本中の字訓と『類聚名義抄』など日本の古辞書との関連についても、いくらか検討がなされているが、今のところ古辞書の訓によって点本中の字訓が説明できる部分は限られている。本研究では、同じ文字に対する諸経の字訓の共通・相異に関する調査を含め、字訓の決定要因に関する考察を進める。

(4) 清原家の訓点・解釈の影響調査

清原家の点本や抄物は、同時代はもとより後代の知識人から尊重された。たとえば、林羅山は若年の頃、明経博士清原秀賢のもとで学んでおり、清原家から学術上の影響を受けているが、その実情に関して、清家点と道春点の点本を比較するなどして解明を目指す。

(5) 抄物における文献利用の実態調査
清原家『論語抄』に多種多様な書物が引用されていることは、既に先学によって指摘されている。そこで、四書・五経諸経の抄物から引用書を抽出し、「清家抄引用書目一覧」を作成する。抄物の中では書名を挙げぬまま引用している場合も少なくないので、この資料集作成の際にはその点に留意することが必要である。

(6) 当時の学術・思想状況との関連
中世期における儒学、仏教や神道における学術動向と清家の経書解釈の関わりについて調査する。たとえば、『論語抄』には、儒学・神道・釈老の三教合一思想が説かれているが、他の経書の抄物において三教合一思想がどのように説かれているかを調査し、その相違点・共通点に検討を加える。宣賢の学問が実家である吉田家の家学と関わりが深いことは指摘されているが、その実態把握は不十分であるため、この点に関しても調査・考察を進める。

(7)翻刻書の作成
これまで清原家の『論語抄』と『毛詩抄』については、それぞれ数種類の翻刻が刊行されているが、他の経書については翻刻がなされていない現状に鑑み、複数の抄物の翻刻作業を進める。候補としては、『易学啓蒙抄』『尚書抄』『礼記抄』『左伝聴塵』『春秋左伝抄』『孟子抄』『曲礼抄』『月令抄』『古文孝経抄』等が挙げられ、これらの中の複数の抄物の翻刻作業を進める。これらに加え、経書学への階梯となる幼学書についても翻刻を試みる。

４．研究成果
(1)清原家の経学に関して
①四書学方面の研究成果：先に説明した通り、清原家の経学関係書では、四書に関わるものが多く残っており、それらの中、『論語』に関わるものの伝存数が一番多いから、家学の伝達・変化の状況を把握しやすい。そこで、『論語』点本・抄物をもとに清原家の経学の実態把握につとめた。その結果、点本と抄物の伝達の状況が明らかとなり、また、両種の資料に対する時代思潮の影響の度合いが異なることがわかり、さらには点本のみならず抄物も家の中で先行の抄物を書き写す形で伝達されたことが判明した。抄物の中で展開されている逐字逐語的な講説は、何晏『論語集解』だけを参考にしていてはそれを行うことは極めて困難で、中国では宋に入って失われた皇侃『論語義疏』が日本に伝わっていた、という文献事情によって始めて可能になったことも明らかにした。さらには、抄物において提示されている解釈の中には、儒学・神道・釈老によって構成される日本独自の三教一致思想の影響が確認できることを指摘した。この研究成果は、〔雑誌論文〕④の中にまとめられている。
なお、清原家の経学関係書の普及を図るため『中庸抄』全文の翻刻書（〔図書〕②）を発表した。

②五経学方面の研究成果：四書学と比べると研究蓄積が少ない清原家の五経学について考察を加え、その経学の枠組み、五経各経に対する研究に精粗があること、各経点本と抄物における新注受容の度合いに相違があること等を解明した。五経に対する講釈の内容を見ると、抄物の記述の多くが各経『正義』の文章をそのまま、もしくは加工して引いた程度のものであり、『正義』に対する依存度が極めて高いことが看取される。このことは、明経博士家として経書の逐字逐語的な講義を実施していた清原家にとって『正義』が恰好の「種本」であったことを意味し、博士家の五経学は基本的に「義疏の学」の範囲におさまる低い段階にとどまっていたと結論づけられる。〔雑誌論文〕①および〔学会発表〕③は、以上の研究に関連する成果である。

(2)中世禅林の易学に関して
日本中世易学注釈の集大成と見なされる桃源瑞仙『百衲襖』の成書過程、内容および構造について解明を目指して考察を進めた。『百衲襖』は、易の古注・新注に即した義理の講釈、『易学啓蒙』などに即した象数の講釈、それに占筮を含む実用の方面に関する講釈、という三つの部分からなっている。瑞仙は易学の伝授について朱子『本義』『啓蒙』―胡方平『啓蒙通釈』―胡一桂『本義纂疏』『啓蒙翼伝』という流れを本流と見なし、自身の易学をその本流に連なるものと位置づけている。これらのことを明らかにした上で、講釈の中に三教一致の思想や日本式の筮儀や祈願詞が含まれていることに着目し、中世易学に関する先行研究を補完し、日本易学に見られる独自性の一端を解明した。さらには、『百衲襖』所引の文章によって胡方平『易学啓蒙通釈』の欠字部分を補うことができる、という文献上の価値があることも明らかにした。〔学会発表〕①②は、以上の研究に関連する成果である。

(3)年号勘文集成書に関して
年号勘文は、年号決定のための陣座において口誦されたものであり、勘文引用典籍の選定とともに、その訓法は中世経書学のあり方を端的に示している。そこで、年号勘文集成書『元秘別録』により、中世の経書を含めた漢籍の訓読、並びにその背景にある漢学のあり方について考察した。〔雑誌論文〕③はその研究成果である。

(4)近世仏教との関わりに関して
中世経書学のあり方を考えるに、中世と近世との差異に注目する必要があると同時に、近世以降、その特質を継承している部分がある。また、近世から近代へ推移する中で、そうした特質は忘却されることとなる。以上の点に鑑み、近世最末期の経書注釈、それも従来研究の及んでいない近世顕密仏教僧による経書注釈活動を研究した。〔図書〕②「解説」にはその研究成果が取り込まれている。

(5)国際的な学術研究との関わり
次項の〔学会発表〕中で示されるように、本研究課題に関連する成果の多くは、国際学会の場で論文発表がなされており、その成果が国際的な学術研究の場で共有されている。また、〔雑誌論文〕④が鄭吉雄等編『台日学者論経典詮釈中的語文分析』(台北：学生書局）中の一篇としてまもなく刊行されることを始めとして、発表された論文のいくつかは外国語で公刊されることになっている。これらのことは、本研究の成果が国際的な学術価値を持つことを如実に示していると言える。
さらに、研究期間終了直後のことになるが、研究代表者と研究分担者一名は、国際的学術会議に招聘されて中世の易学に関する論文発表をそれぞれ行うことになっており、このことも本研究に関わる研究に対する国際的な評価を反映していると思われ、今回の基礎的な研究を踏まえた発展的な研究計画の策定と実行が期待される。

(6)反省点
当初の計画では、清原家『中庸抄』以外の経書に関する抄物の翻刻も行うことになっており、その準備を進めていたが、時間不足で刊行に至らなかったことは反省材料の一つである。これとは別に、清原家の点本に書き込まれている字訓の決定要因に関する考察、後代の経書解釈に対する清原家の訓釈の影響に関する調査、および清原家の抄物に引かれている佚文資料の調査等々も研究計画に含まれていたが、それらを実行することができなかった。また、研究計画を遂行する中で収集・整理したデータの中、利用するに至っていないものがある。これらの反省点については、次の研究計画を実行する際に生かしたいと思う。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
① 水上雅晴，清原宣賢の経学―古注の護持と新注の受容，琉球大学教育学部紀要，査読無，第 76 号，2010 年，51-65 頁（http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp/handle/123456789/16489）
② 比良輝夫，『無名抄』の「数寄」，釧路論集（北海道教育大学釧路校研究紀要），査読無，第 40 号，2008 年，13-18 頁（http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/1078）
③ 石井行雄，室町時代漢籍訓読の一事例―『元秘別録』と言う窓から―，語学文学，査読有，第 46 号，2008 年，11-20 頁
④ 水上雅晴，清原家の『論語』解釋 ： 清原宣賢を中心に，北海道大学文学研究科紀要，査読無，第 125 号，2008 年，65-118 頁（http://hdl.handle.net/2115/33914）

〔学会発表〕（計３件）
① 近藤浩之，《易》詮釈中的桃源《百衲襖》的《易》学，中国典籍与文化国際学術研討会，2010 年 3 月 8 日，中国・北京大学博雅国際会議中心
② 近藤浩之，桃源的易学与柏舟的易学，第三回儒道互動国際学術研討会，2009 年 10 月 24 日，台湾・国立台湾大学
③ 水上雅晴，清原宣賢的経学――古闡釈的護持与新闡釈的接受，中国経典文献詮釈芸術学術研討会，2008 年 11 月 24 日，中国・北京大学古文献研究センター

〔図書〕（計２件）
① 水上雅晴，中世経学研究会，〈点校本〉『中庸抄』（稿），2010 年，150 頁
② 石井行雄，天台寺門宗教文化資料集成教学編編纂委員会，大寺守院関係資料群第Ⅰ期「解説」，2009 年，150 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
水上　雅晴（MIZUKAMI MASAHARU）
琉球大学・教育学部・准教授
研究者番号：60261260

(2)研究分担者
近藤　浩之（KONDO HIROYUKI）
北海道大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：60322773
比良　輝夫（HIRA TERUO）
北海道教育大学・教育学部・教授
研究者番号：00109406
石井　行雄（ISHII YUKIO）
北海道教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：60241402

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：